

LICENSED PRODUCT
3/Color Black

20

19

18

17

16

15

14

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

JAPAN

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

記述 三重縣

平成元年
八月

中村俊定文庫

文庫 18

232

記録三益齋自序

丈師ハ其道ば付え。至難を受け。
その惑を解く。うの韓昌黎院も。
かくせは大うへにゆき(ちあら)。
いふやせ思ひ浴(く)。け身汗(あせ)や。
きの血(みどり)やあや。けは(もろみ)
衣(きぬ)を振(ふ)り。小(こ)せ入(い)る
うやまひは(は)す。も

新あひの芳をいとす。報ある
ふくはぬあらましや。さす
ゑ何來翁多風涼士。度々
ゆるはざれ内十日。あま人の
歎け入絶む。あら従遠は
諸子多き。はこそせ事ひる
のあ門人有。終焉の事ひ
獨角のあり。折ふ一聲ふ之

を以。期年も庵庵隙駒
を縫。はる向のあら
す。あは持事拈香のあけ物
をちへ。おち牌を守るがて立
し。しむ
と。三圍の忌日。袖じくえ。
よき。おおやまむと
し。しむふ。すりすほ名を

はへえ。おまえはどうもほの冥加
ちやくわあ士とあゆく。ひよ
福糸の事ある。し深恩辭
まへとあらす。ト多抄き
顧す門。汎舊知の佳は得あらず
れやけ。禄。緝りはゆふ
梓を流す。おまえ三毛の

追薦あくの作。お
あすといへ。母。彼吸醋の趣。か
俱か芝師。米。の一味をあろ
じる。山。緝も見む
三盃酢。おまえはけ。まぬ。おま
とう。誰。破。一つ黒。苦。の
理屈をばねね。あ。それ。老の
沙汰。おまえぬ。お。おまえ。

誹謗の甘くもあらず。新氏の
才、便も流しまで。ああも
かゝる集のあくまばや樹へ。
あはれ、瘦我のそぞり
あるゆ。

ええ、おえ、おえ、
秋九月

毎事庵を室平砂



追悼獨吟歌仙

臯平砂



醉和みちをもひ秋のふりひか
宿狭くと影あるじ有
綿おの布子、まのう恩よきて
胡壁うちも退屈
川柳のよみよほせぬ約言せ
もう雀比名ハ放すまく

初見てはあき難がとうとううう
うういきもぬる字と読む
宿泊の様式とみ據る
ひとり寐の多く仲人へと
眼鏡とて鹿目夢ひ叶ふ
大卦をへとくわゆ好
買水の水を賣く 月の角
歛とあらかまの受け渡

名
熊坂ハ毫とも松ハ有 みう
卧床 ちりく 猪 みむ
り車や庫裏ハ皆夢小の波
とうもと切進む、蒟蒻
毛氈と傳へれどこそ序幕う
きい様身ハ寒のほど合
うんぐの波とて激す起稿文
向く 猫子の頬を拶むせ

猶／＼よ鬼／＼おはとひり者
くまれ舟形と圓／＼あ姫
小便跡／＼いの鐘禪堂
カ／＼すのま／＼ふ馬れとろく
黄色／＼模もあに烟／＼ら
膚／＼付ゑせの秋／＼まゝぬ
多／＼ハニ廻／＼め／＼ら
ト／＼時／＼時／＼

ナ
忘れ字却ゆきと年ゆきとすね
ミ浦ミ浦の浦ハ浦／＼り
老海の浦虹ふ息／＼次
亨て至ても既く石臺
中挽み外すまゐハ もひり
孙生の鼓甲ニ自然

追悼叢句 任爲未之才

漬蓼や種子出の晉子^ヲ破を
扶^リ貞佐子もひくさりす^{サル}也

漬蓼^ヲ獨醒^{アマ}ア^ミ十之秋

午寂

もとる一栗もとる^{シテ}向也

不ハ苦り^シれどり^シる爲の玉

和推

シキとと薦^シもあめや十二日

來的

たゞせく栗もとるの泪^シガ

吳川

其じきる薦^シの玉^{ヤシ}と酒

左人

八重葉^ハ孫^ミ又厚^タヒ向^カが
萍^{ヨシ}柳^ヤ一字^シシモ^シか^シ向^カ也
琴^佐越^栗や又^シもあれぬ^シの乃^ハ
燕^佐や^シ解^シと^シ萩^ヒと^ハ時^ノ草^ハ也
影^モほ^シ十^五日^のし^ハ如^シ
来^シ時^ヘ何^シも向^ジ
報^レ土^ノ栗^モ三^一年^永我^モ
碑^ノ下^シけ^シも^シる墓^の土^シ來^シ水^シ
ああ^シ木^モちれ^シも^シは^シ御^シ加^シの^シ水^シ
起^シ己^シ

めくらとすまへシタ事の多ト
佛手柑や妙糖の味ももやシを
うじ唐もほの豆もとほの内 和三
ミキハ音とあり 葉秋露 律山

之年の喪す竹虫の仲弓固士

貞陸

あとのもふ白あむモナミね

貞聖のう猪也

義水

邯鄲の世や日ぬりのね

海五

あもよき際とほの三度栗
石磷 盆か處のゆる下きのゆき
其國の樂いふほの月 鬼人
夜歌林せりくも向じえの山帶
り歎の足れどよ三画忌 蝸牛

穴佐翁の三ひと吊佐とく

松照や三序の月は下よハ

魚千

之をやうのあらゆやこゝの葉

貞萍

詠 諧 中興貞佑翁

虫もぬき仕とれどに夜栗

彼國の西日下には葵葉武

乾什

燒ひ秋やあじ日日もくらむ物

豊川

来・時、門子三人の急業者
旅塗るくくりと化す

御湯の味と向よ葉の薄

來川

一楓の光絶す

岸の約世か不

かづく望未ゆくまう大根荷

半路

アリカヒト尾も向く墓

老鼠

椎の実や巻としげの小ち累

来也

菊の魚やことをやうなが猪口

晋阿

あそし秋そしとくらう墓

諧

山郭
秋十三夜の心と感へ

蕭四小自業みどりと年忌 尾谷

かあやめうきめす宝珠
御みみふくひるい様の宮 二川
去きゆふまねせとくく三安栗 貞山
貞佑居士母子在り對ハ乃と好く
又雅有詩也一叶之葉も其の妻も
あらと運ひ墨子詩也

鳴く口鼻の弦よや墓の草の秋 大漁
河をくさのう秋告よ赤鶴玲 流光
暮るまや場のあらと秋之度栗 百洲

歌仙

玉蛾

か梨か魚の東やむ向ひ
適すも弓の傳うき わ 平砂
波の月丸ふあては帆よとて 其蒼
力くくくへ石うき 陸 その條
一二杞のあそこよ縫乃柳か咸 松宿
賣 奎林 湯す句れ 豊川

引出シじよ示とはゆ大工第
大峯傳より傳ひ猶指
細乃其自由の極く触接
豆腐トモあはれ物の事
頃様の筆道ハシノヒツヨウの如
白き体不^シくもろきの言
子子の振舞ハタハタ朝比奈
直^シてものあひふ納ハタハタし
蒼砂宿條訥子

ちつと神功傳といへる言ふて
梅庵遁^{シテ}る 花の一 日
絶の曲海之末羽^{シテ}り
處じ四角^{シテ}皆質^{シテ}る
竹光^{ハシキ}を近^シる業^{ハシ}く
絶句^{シテ}かくされ急か^シしけ
否口小四^{シテ}なる^{シテ}あらす小ねのあ
あきまくらく三里^{シテ}すえ^{シテ}り
絲子川右砂菟條

宿乃地 佛もまとハ墨もろも
凌草紙 小運ふ 夕汝
雪の日す目腐れ書はぬとし
物 カラムサガセの果
い十光生もあづけのゑもほじ
奥もくらははゆる川並
彦のれく敵よよゑふ内
破く瓢子 罗い山雀

子有條

毛見まへ勘内傾の纖序
丁とよ人目撫抱もあ
安る迎う机もたゞ仇もや
しづかの神ふ ねハ 手持
赤遠 え曉のニ高鶴
修也他村よ 惜じ度は
祇巫

白葉林は利子ゆくも向か

百菴

超波有佐平砂の葉林不れを
貞翁り世の鳴し光もすや

九月や翁か三つの枝小枝

局菴

弟子の画すく來て時と賀と乞幽
あらうか何するか即ち古物と
書様ゑみ字へんせきをすまひ
辻り迷もぬ活潑うるむ

多々ハいつこしおか哩を詠

舊室

栗の木のうらと多くこそ思

弘武

如き輪郭元よ松木の秋が季

松閣

歌仙

其畔

多々於其まよ枝を扇の毛向か

呵哉傳（）身ひとつ秋

平砂

月の扇身ゆふ亭主退出し已

歩閣

叶ふくしるの恥ハ毛籠

超波

風ふけ松のむぬより生柄折

可容

五面とせ細ふかゝ群鶯

観華

ひるふ堂の指^{ハシ}し深^{ハシマ}か
ゆく桺^{カシ}木のや好^{ハシマ}か
縫^{ハシマ}縫多^{ハシマ}か仁義禮節^{ハシマ}
姿^{ハシマ}のと形^{ハシマ}烟^{ハシマ}もあせ
跡^{ハシマ}の鶴^{ハシマ}の笄^{ハシマ}は様^{ハシマ}
は^{ハシマ}色^{ハシマ}じ清^{ハシマ}のゆ^{ハシマ}内^{ハシマ}石^{ハシマ}
漕^{ハシマ}於^{ハシマ}塙^{ハシマ}とゆ^{ハシマ}ける事^{ハシマ}舟^{ハシマ}
か^{ハシマ}一^{ハシマ}も^{ハシマ}老^{ハシマ}色^{ハシマ}裏^{ハシマ}のと云^{ハシマ}け

ト根^{ハシマ}もあ^{ハシマ}おきの月^{ハシマ}と葉^{ハシマ}吹^{ハシマ}
並^{ハシマ}ん^{ハシマ}くにれ^{ハシマ}洞^{ハシマ}底^{ハシマ}の道^{ハシマ}宏^{ハシマ}吹^{ハシマ}
何^{ハシマ}所^{ハシマ}と波^{ハシマ}音^{ハシマ}上^{ハシマ}戸^{ハシマ}
ち^{ハシマ}もあ^{ハシマ}か^{ハシマ}い^{ハシマ}化^{ハシマ}人^{ハシマ}あ^{ハシマ}り^{ハシマ}
大^{ハシマ}佛^{ハシマ}小^{ハシマ}大^{ハシマ}工^{ハシマ}もサ^{ハシマ}も傳^{ハシマ}し^{ハシマ}
あ^{ハシマ}つ^{ハシマ}も^{ハシマ}著^{ハシマ}タ^{ハシマ}部^{ハシマ}の有^{ハシマ}
黒^{ハシマ}ハ^{ハシマ}墨^{ハシマ}寫^{ハシマ}付^{ハシマ}る^{ハシマ}岩^{ハシマ}の岡^{ハシマ}
す^{ハシマ}あ^{ハシマ}あ^{ハシマ}幸^{ハシマ}ひ^{ハシマ}う^{ハシマ}す^{ハシマ}す^{ハシマ}す^{ハシマ}

独火のけくは唐々
堤 穂清 小村ハ瘦こけ
やのくと明智日向毛日か向ふ
風うきも知のそし死
漁 お能のかふ 壱 島
子の初刺 小瀬守行 徒
ニヨ月日の出せよと序
始る木 強は柔弱の娘
時砂國時砂國

里ノ宿も御くらの有
老廢斗もす竹の丸納
屋根葺ハ五風十雨のうに合
私以て貰ひ枝小赤土
枕絵石とくつあきのあの昏 宮
ちあし後りすくわすの辟 駕學

七哲解もやほりわゆる十三松と云
うふまつともく

けんく秋の解も鳴うめ

三省改
推省

緑魚の根もよ緩く地覆尼か

松下

翠山も崖のみ事も詠うず

異川

三月の東歌もみやうかく
すくとのむ向りのくじ

夏の秋其矢もくやニサノ
香とよきと袖千とあき月日ト

可容

めらか秋佛の舟も三度まと

和専

歌仙

句柏子詩とあるれしに酒

其道

蚯蚓も鳴く守る黄昏

平砂

月の露北の梢へびがん

桑夫

そをきくとよあくぬ井戸

有佑

一俵と豈よあせば背中け

吟國

苗乎の粉薄ゆる

芦

有林

朝も成多の角が宮
夕し上手ハまくまくぬ唐
姑の毛もあわ山あ流
簷の音さう小枕刻
セツ立人扇ひかとちの起居
あやま雨カジシヅ獨
鳴き四季の詠ハ百念物
神田の岱ハ唄ササ岱

お笠原小指の仇ハ老くと
一字も讀らぬ屏風譲レ
月何うひ巾ハ花の下
未鐘タツ羅と里リ
ニの日被着アラガキ打
海士シマヒもいる害
ふりと傳筆ハ用うけす
まのものとね葉まの白妙

糸袖も唐柏の中へ承乃考
鶴鷦立く石に紛れる
早追ハ弓彌月小丸とぞ既
ト度の山龜^{タヌキ}は
仇人の地すまほも解く事
一處林中^{シテ}の舟の移^シ居
口と物^シ仕事^シを始離^ス

深茅小清一茎を幾世ゆる
あの駒^{シロ}乳母^ハ遂まい
虫葉苦き^シ小沫^{アツミ}夫^サ
あれ^シ也^シ柏の^{シテ}楊^シ④^シ
拂^フあそ^シ姿脩^シるむこうも
絆^{シテ}ゆき^シ此の^{シテ}み影^シ
執毫

故人夢に畔と傳ふるやま

やまくい稻ち酒の秋 湖十

南陽のしづかをくと日はつよ

亡歸あるは面忌のを向くるすり尔

白氣や十萬位土うせほ 衆史

佛かるのいきりわね

モリみう撫く、追ねの候おト

麥阿

純情もしきの香おわき

花深

ちうる栗のうじやむ向

常仙

歌仙

松ちゆすとやわ紫のお名き

晩笛臨へれ落乃孤

平砂

詩ノは寒し細い月アセシ

麥阿

何合入於佛

豆蘭室

商ひ小世間拂拂くももちト

輕子

あくまおうり櫓のどろく

孰筆

タ
春物と里へ此幕い身す而は
菖蒲抱き階子ありす
二代目ハ只の壁し大は壁
絢毛てうすは老の金は薄
疏鷺絆の小袖ふ紋詰もひそき
楊風の身も雪もひそき
ヒテ也、鞘と妻目小買あす
老くらぬ山下す
九

戒名とあらぬ田向とおまゝ
勦くまいとや痛の情 刑 砂
枝わ戸林毛で画するの庭 李喬
あまく維の葉はれり
候もよれ呂ねるる汽の舟 宮 沾古
大事ふ掛く併すか袋
達石くのまほ歩ます小紫垣
子はふみすももの庭前
十

おまきあは小是ハ扇こく葛籠馬
數珠さりふくおく姥カ
われのうくも這入度重敷
ごんと駄毛の様マサキ
おのえもさや條セシの世セシ親
ぬ木兔の目ハリ切
萬葉相ハシマ白くと猶モ月
挂ハシマ葉ハシマねくい射

伯父ハジメ山ヤマと里スミと祝タマシて
砂地シダのねヌめ古レバに墓ツブもシ有リ
仰アガそシ呵ハらハまハかハ小ハ鳥トリ子コ子コ子コ
あいそシりシ拂ハ友チ古レバ古レバ拂ハ
道シテの花ハナ東方ヒマラヤ朝アサヒのシテみシテり
於ハ鶴トリ度ハあ代ハシマのシテ多シ

芋と豆栗と二色とも向 わ 長鶴

日あらてへ船といふもや葉の傍
角力丸松木櫻のメリ

京 輕子

舟はの舟とも身の神龜 四 佑
とひづるをすむとお様きくよとすみ
武蔵の中ふすまつまくとすみ
そもよすまくまくまく

氣のぬゆんま陽れ袖つか

京 輕子

ふ猶と數す能すや草の香 其漁

史師の多福其松の
一集世のや脇

碑や多難の中ひよの松 沾山
ちじ若の松が秋と重すより 歩閣
きねどりすよ

はのぬ戸のワモミの酒 羊素
新酒やニモリおのむししくと 有芳
里の舟とよしと重すより 笑水
もく小暮多一葉す行 佐朴

懷風狂之旧地

ゆきの新場の歎をうつた
園内院の石塔や草のそし
いとまもとるく
もしもまわり草の錦はのろ 旦調
自牡丹ミムギをめぐらすむねうか
葉の草が鹿を伴ひ向うか 芦葉
ゆきく、あくま事はのよ向うか 調佐
鳥のやうすのくまも因う那 祇丞

遊みの丘れをすくわ
えほえの毎ちむけり風ひう
師のうれども鶴ふことの多 有佐
秋を度やく 岩屋のあ下り 千尺
石付へくはのまや下りみち 東鳴
赤強さむ向や度き草お花 里屋
たくの草のあがやうくはうか 一葉
モハ〜〜も向の〜や草 烟 雪虎
葉の草ふうのあまよむ向く
桐糸

は恩の二字もする一ちひの事方
ちやこひの物うきをすりや十三夜
芳一にあがめく首や梅紅葉 其條
ゆれもしき風や 露時也 白水
ほどの月の鳴たえひうか 羽扇
もやう年もそむ向とせのあ 倍之
りともも秋のりまことに事情 其英
お陰は萬どむ向のこゑうか 露碩

白葉やうれいが教ある昔のあ 吟國
うきの葉の栗ともつみにえくせく 汀文
色ハシテあはせ能くの秋や 五疊
いた年向舞きと葉も二つの歎 松宿
白猪のぬもるや大祥と本ぬ
着れりくと向一十三夜 逸理
惜じるのあの大いやしき房 来里
君うやこせの秋のは恩も 専佑

秋多氣のぬや拂ふとつの居
三つわふ包ひ小葉のも向か
タ多もとつある秋やはの乃
之栗とみの佐さとしけり
拂らぬのあれねやその影
景うき佛まよす黄菊卦
拓角に毛じ椀くたり西の空
其蒼
兼ハむろへありもるゝ有
故一

拂えりむらかのじもばお花 夏箕
ニ董もむとひてもやも回相り
但少一畝の厚薄とて
ミカドや刈田の泥の、薄れ縮 超波
世の秋と佛よすみる 檻う耶 幸徳
里し寺宇は世の城ほり也 沾永
董もむとひともや柳の葉 文峰
誤テ 芋一栗 三年 大國
拂えむらかの秋も暮之 琴侶

このきは栗よりもすきを向か

存義

来^スま三田の日數と

男^シし弟^ク

ね虫やもや千日のはか林魯
ちよ柿も仏果^ハゆうり舌^鼓未央
あはの波貞^{アヘ}ーを向^面卧英
ゆくみや枕^ホじく秋の味^{來揚}
後の自三年はあら鳴^カ初篁
猶^シすゑみ檀^ハさの木立^シ唐桃

来^ス畠の毛忌^モあじきく

モ門^ムん^ドそりけふ

笠^ハすゑる^ハ苦^ハなり袖^のあめ時^ニ

樓川

葉^ハ畔^ミのあ^ハ生^ハあ^ハ有^ハと^シ好み
ほ^シく^シみ^ハと^セせ^ハと^セす
活^ハ作^ハ世人^ハの耳^ハ小^ハ在^ハあ^ハと^セす
持^ハお^ハし^ハ亦^ハ

見る度^ハ小^シ輕^シも秋^のか^ハみ^ハ大^シ梅
折^ハうり^ハ向^ハり^ハ木^の実^時竹郎
その^シの姿^を葉^ハ落^ハし^シ靜^シ南壽
秋^の葉^ハ何^シ夢^ハも^シ向^ハの日^ニ訥子

墓原の袖もあうて而て十二日 珪琳
あはせよ酒とお下戸
きぬこのとき事とせら
を向くわゆむことせば秋の色 安士
あ梨子の味や忘せぬ三田忌 豊川
世作あくまじの栗が元切が 文石
白糸や生むよほどの椀の中 黒己
れすおや文庫の隅トキトクす 馬光
あづや三毛先の粥乃け 沾洲

此の一生もよものゝ寫
お芋がんばる
もとまちやこくはりのひく
ぬるよおみかしつの味と成る
せつをみじよおもとおめ小葉を
あはる獨處よ活もとと諦る

乎も亦お財おとしがわらひも。後
 オリひのおとしあゆく。之。歎くい
 う。とわざま。其。我おしむ。の
 う。う。と。ア。お。は。う。の。の。
 舞。舞。舞。舞。

序文主千文 元文西石け
 元文元年一月 平砂せん九
 の。の。の。

